

巡礼をめぐる理解と誤解

Understanding and Misunderstanding on the
Term of “*Junrei* (Pilgrimage)”

中山和久

①概念をめぐる諸問題

②巡礼研究の成果、または巡礼の理解

③巡礼の多様性、または巡礼をめぐる誤解

④「巡礼」研究の課題

【論文要旨】

概念の問題は常に気になるものである。「定義」の確立という言葉の魔力に容易に屈服させられるほど気が弱くは無いが、無視して論を進めるほど気が強くも無い。

本稿は往々にして厄介な概念の問題を、「巡礼」という語を事例として、巡礼研究の文脈において見て行くものである。考察の対象は、研究者による巡礼理解にとどまらず、日本で広く用いられている用語における巡礼理解をも含めたものである。すなわち、まず、研究の動向を時系列に従って押さえつつテクニカルターム（分析概念）としての「巡礼」を考え、次いで、用語としての「巡礼」と巡礼的行為を視野に収めつつフォークターム（民俗語彙）としての「巡礼」を扱うものである。特に後者においては、民俗の事実が有する研究者の思惟を超える底力に委ねて、「巡礼」の周辺から立ち上がる巡礼の多様性を数点の図とともに提示する。

また、「巡礼」に関しては翻訳語との関係で困難な状況が生じ易いのであるが、pilgrimage との比較研究を進めるためにも、これに関して整理を試みるものである。

最終的には、こうした問題意識にかなう、有効な「巡礼」概念の定立が求められるため、本稿でも一応の概念規定を提示するが、しかし、多様な巡礼の在り方が示しているのは、担い手の外形上の表出と内面との関係にこそ重要な問題が潜んでいるということである。それは人々の心に映ずる「歴誌」の問題であり、巡礼の意味の問題である。こうした「歴誌」生成過程の中にこそ、現代科学では超えられない癒しや救い、生きがい、心の処し方といったものを実現する豊かな民衆の知恵が秘められていると考えられるのである。

キーワード：概念、用語、翻訳、巡礼、多様性

①……………概念をめぐる諸問題

研究には概念規定がつきものである。本来、概念は研究者の問題意識や研究意図によって、使用する他の概念との関係の中で編み出され、設定・規定されるもので、関係性の中でしか存在し得ないものではあるが、往々にして本質論的な議論が盛んに繰り返され、普遍的な概念の設定が試みられてきた。

概念をめぐるのはポール・ロワイヤルによる「外延／内包」の古典的な議論や、ソシュールによる「意味するもの／意味されるもの」、文化相対主義が提示した「エミック／エティック」などの問題がある。最近では、特に近代を分析する文脈において、人間が過去の歴史的な概念そのものの中に現在の欲望を、意図的または無自覚的に投影して変容させ、創り上げることが常に行なわれるということや、言葉や概念が創出されることによって始めて対象が意識化され、恰も実体的存在であるかのように扱われるということが問題とされている⁽²⁾。さらに分析概念と民俗語彙の問題もある。概念や言葉というものは、厳密には使われる状況や使う人の意図によって意味内容が異なるのであるが、一応対話や議論が成立するのは大枠として共通理解があるからであろう。

筆者は巡礼に関心を抱いて研究しているが、巡礼という概念においても以上の問題は同様に存在する。しかも、“pilgrimage”が「巡礼」と翻訳されているため、他の概念に比してかなりかみ合う議論の成立が困難な状況にある⁽³⁾。また、現実の日本語での「巡礼」という語彙は実に様々に使用されており、その状況は多様な巡礼文化が存在する可能性を想起させるが、そうした事象は研究対象としてはほとんど取り上げられていない。

本稿は、こうした巡礼研究における概念の錯綜を整理することを主眼とする。即ち「巡礼」という用語を事例として、概念と言葉の問題、フォークタームとテクニカルタームの問題（あるいは民俗語彙と分析概念の問題）を考え、概念の自明性を脱構築することを試みるものである。それには以上の概念をめぐる問題を念頭に置きつつ、日本における巡礼に関わる状況を見てゆく必要がある。そこで、まず研究における巡礼の取り扱い方の状況を（第2章）、次に一般に用いられる巡礼と、巡礼的行為と思われるものを（第3章）検討してゆく。そして最終的には今後の巡礼研究における分析概念としての「巡礼」を規定する際に、どのような方向性や前提が考えられるのかを検討するものである。

②……………巡礼研究の成果、または巡礼の理解

本章では日本における巡礼研究の展開を整理することによって、巡礼がどのように理解されてきたのかを明らかにする。問題意識と定義またはそれに準ずるものを見ることでテクニカルタームとしての「巡礼」の概念規定を抽出しようと試みるものである。

1907年に発表された藤田明の「西國三十三所霊場と順禮の權輿」⁽⁴⁾は、巡礼が近代的な学問大系における研究の対象とされるようになった初期の論文の一つである。そこでは遠方の霊寺名利を拝する「廻國巡禮」が対象化され、その具体例として「西國三十三箇所の観音」、「坂東三十三番」、

「秩父三十四番の霊場」,「四國遍地八十八箇所」,一向門徒による「二十四輩」,浄土宗の「二十五箇所の霊地」,「諸國に之を縮寫して,一都市又は一寺中に霊場を集めたもの」,「七観音」,「六地藏」,「十二所薬師」,「三十所辨天」,「洛陽三十三所観音」,「六部」が対象化され,その成立起源と歴史的展開を再構成することに主眼がおかれている。

大正期の巡礼研究もこの問題意識を継承するが,さらに巡礼者へも関心を広げている⁽⁵⁾。また,宗教者や篤信者の手になるそれまでの巡礼案内記⁽⁶⁾とは赴きを異にする,非宗教者の文筆家による巡礼記⁽⁷⁾が発表されたが,のちの巡礼研究の方向性に少なからぬ影響を与えたのではないかと思う。

巡礼研究は昭和に入ると,四国遍路八十八箇所と西国三十三所観音巡礼(以下各々「四国」,「西国」と略する)について一層深められた。それに加えて,各地に存する「四国」や「西国」に類似する巡礼までもが対象化されるようになった⁽⁸⁾。また,先述の藤田によって提示された巡礼のうち,それまでほとんど取り上げられなかった六地藏や六部の研究も本格的に開始されるようになった⁽⁹⁾。この傾向は敗戦から高度経済成長期の研究にも受け継がれ,着実に研究成果が重ねられていった。

以上のような問題関心による巡礼研究は,昭和50年までには,細部の追求はともかくとして,ほぼ円熟の域に達した。資料集的な面では遍路記や巡礼コースなどが近藤喜博や中尾堯らによって集大成されたし,歴史的な成立展開過程の研究においては新城常三らが業績をまとめて発表した⁽¹⁰⁾。様々な研究者がそれぞれに「西国」や「四国」の発生を論じたのであるが,研究の進展は,巡礼の捉え方にも微妙な差異を生ずることとなった。新城は「西国」と「四国」を社寺参詣の一形態として取り上げ,室町時代中期に宗教者の参詣から庶民の参詣へ質的に変化したことを指摘したが,速水侑は観音信仰の発現形態のヴァリエーションとしての三十三所巡礼コースの成立に関心を抱いた。こうした研究成果は平幡良雄らの宗教者を媒介として非研究者である一般の人々にも知られるようになった⁽¹¹⁾。

巡礼研究において1970年前後は大きな転換期であった。武田明による「民俗」の視点をはじめ,前田卓による「社会学」の視点,五来重による「遊行」の視点,田中博による「地理学」の視点など,新しい視点が次々に導入され,分析に応用された⁽¹³⁾。海外でもターナー(Turner, Victor)が,1969年にThe Ritual Process: Structure and Anti-structure.(富倉光雄/訳『儀礼の過程』1976思索社)を,1974年にDramas, Fields, and Metaphors: Symbolic Action in Human Society.(梶原景昭/訳『象徴と社会』紀伊国屋書店1981)において,ヴァン・ジュネップの『通過儀礼』(弘文堂1977〔1909〕)における隔離の状態をリミナリティと関連づけ,pilgrimage(巡礼)における長い道のりによる日常世界の転換の体験(コムニタス)に言及して新しい分析視角を提示した。ターナーの論は内外における象徴人類学の隆盛とあいまって後に日本における巡礼研究にも大きな影響を与えるのである。

1975年に真野俊和が発表した「四国遍路への道 巡礼の思想」(エヌエス出版会『季刊 現代宗教』1-3)は,前年に遍路として実際に歩いた体験と,宮田登の『ミロク信仰の研究』(1970未来社)や山口昌男の論考を手がかりとして,説話分析も絡めながら「四国」を考察し,そこに死と復活(再生)のシンボリズムを見出しつつ「順拝とはいわば神話的時間と空間に自己とその肉体を投入することにより,彼らの信仰が達成されるという構造をもっている」と論じたものであり,巡礼全体の意味を理論化する方向を打ち出した画期的論文の一つであると思われる。真野は続けて,

青木保が1975年に「巡礼の思想」(『毎日新聞』11.18夕刊)において示した「精神の型」を示すものとしての「巡礼」⁽¹⁵⁾類型を取り上げて「巡礼」と「参詣」の概念を議論の俎上に載せ、「社寺参詣」を①メッカや伊勢への巡礼(参詣)にみられる「ある単一の目的地に達するために行なわれる参詣」と、②「西国」や「四国」などの諸巡礼にみられる「単一の目的や対象を持たず、むしろ各地をめぐる歩くことの方に重点がおかれる形態」との二つの型に大きく分けて概念規定した[真野 1976]。真野はさらに庶民の寺社参詣、各地を巡る聖、旅する者とカミ・ホトケとの関わり、旅の種々相の探求を継続し、民俗学の成果をもとに巡礼を「旅」の文脈において捉える研究をまとめ⁽¹⁷⁾た。

1977年、星野英紀は「比較巡礼論の試み—巡礼コミュニティ論と四国遍路—」(仏教民俗学会編『仏教と儀礼』国書刊行会)と「遠隔地参詣の類型的研究序説」(『密教学研究』8)という、巡礼研究にとって重要な論文を二編も発表した。星野はターナーのコミュニティ論を援用して巡礼の儀礼としての意味付けを重視し、人類学的な視角から宗教学的に「巡礼の構造」を分析した。これに関する一連の研究成果は『巡礼—聖と俗の現象学』(1981 講談社現代新書)でコンパクトにまとめられて普及した。星野は、居住空間と聖地とが「離れている」ことを巡礼の中心的意味内容の一般的構造として捉え、巡礼を「日常生活を一時離れ聖地に向かい、そこで聖なるものと近接し、再びもとの日常生活に戻るという宗教行為である」としているため、ヨーロッパ諸国にみられるような目的地が単一の遠隔地参詣を「巡礼」であるとする考え方を強く肯定する。⁽¹⁸⁾

真野と星野の一連の業績により、巡礼研究は日常(俗)と非日常(聖)のコントラストの中に巡礼の意味を探る方向性を持つに至った。しかし、ここまでの状況は「巡礼研究はまだ緒についたばかりである。研究者の層も薄く、蓄積もなく、方法論もそれぞれに手さぐりの状態が続いている。」[真野 1978]と評価される段階でしかなかった。1980年代以降の巡礼研究を盛んにした契機は、1979年に雑誌『伝統と現代』(No59)が総特集として「巡礼 聖俗両界を巡る」を組み、多彩な論考を掲載したことであったかも知れない。その一つに山折哲雄の「巡礼の構造」という論考がある。この中で山折は「巡礼の原体験といったものの意味」を考え、ターナーや五来、真野、星野らの業績を堀一郎が『遊幸思考—国民信仰の本質論—』(1944 育英書院)で提示した視点と結び付け、巡礼における「宗教意識のレベル」を指摘した。それが①「カミの巡行」、②「^{カリスマ}聖者の巡礼」、③「庶民の巡礼」の3段階である。このまとめ方により崇拜対象の神仏が巡行することや、行者や聖などの特別な宗教的職能を有した人々の巡礼も、一般の人々による巡礼と比較しうるものとして認識されるようになったのである。

1980年代の巡礼研究は、ターナーの研究が翻訳されたことに加え、上述の真野、星野の研究や『伝統と現代』59で展開した発想を所与の前提とすることが出来たため、研究対象の裾野が広がって再び新たな進展を見せた。巡礼が参詣や遊行、漂泊、遍歴、放浪、めぐり、旅といったものと当たり前のようにセットで認識されるようになったのもこの時期であろう。

ターナーの所論を応用した研究者の一人に青木保がいる。1983年の「現代巡礼と日本文化の深層」(V. ターナー、山口昌男/編『見世物の人類学』三省堂)や1985年に発表された二つの論考、「現代巡礼論の試み—御岳登拝を中心として」(『境界の時間—日常性を超越するもの』岩波書店)と『御岳巡礼—現代の神と人』(筑摩書房)では、従来の巡礼研究が主に対象化してきた「四国」や

「西国」の巡礼と御岳登拝などの往復型巡礼との差異が認められつつも、構造や機能における儀礼としての同一性が強調されている。こうした流れと対応するのであろうか、「海外における巡礼」の研究も西洋史学の分野を中心に蓄積されてきた。⁽¹⁹⁾

また、「カミの巡行」に該当するであろう「遊行仏」も巡礼研究の範疇に登場し、「聖者の巡礼」に相当する「三十三度行者」の研究も主題化されるようになった。⁽²⁰⁾ オートドックスな巡礼研究である「庶民の巡礼」は、人文地理学の研究者を中心に堅実な成果が積み重ねられ、二次的・地域的な「うつし（移し・写し）巡礼」や「地方巡礼」を題材としての研究も広く行なわれた。⁽²¹⁾⁽²²⁾⁽²³⁾

一般に研究対象の裾野が広がる時には、研究成果の回顧や使用概念の反省が行なわれ、将来の研究方向が模索される傾向が往々にしてある。巡礼研究においては、小嶋博巳が「巡礼・遍路」（『民間信仰調査整理ハンドブック上・理論編』1987 雄山閣）で巡礼概念を広義と狭義に分け、狭義の「ある宗教的理念によって関係づけられた複数の聖地に対する連続的な参詣行為」という意味に従って論を進めて「巡礼の地域社会と関わる局面」・「うつしの巡礼、小規模な巡礼、非定形的な巡礼」・「民間のナイーブなめぐりの習俗」の研究を課題としているし、小田匡保が「巡礼類型論の再検討」『京都民俗』7（1989）で日本の地方巡礼地を典型的に把握するという意図から「信仰圏、聖地の数、巡礼地の開放性、巡礼対象、巡礼地の範囲」を指標として抽出した上で「聖地の数や巡礼対象は、それほど巡礼の他の要素に影響を及ぼしてはいないのではなかろうか」と予察している。

1990年代は学問研究に限らず、政治的な状況も「多様性の時代」であった。巡礼研究においても、様々な巡礼的な行為や出来事が取り上げられ、「巡礼」として分析された。豊島修らを中心に発足した「巡礼研究会」では多彩な発表が繰り返されているし、雑誌で巡礼が特集されることも多く、1990年には『季刊 仏教』（No12 法蔵館）が「さあ、旅へ」として19本の論考を、1993年には『しにか』（4-9 大修館書店）が「巡礼の生態学」として8本、1996年には『歴史読本』（新人物往来社）が別冊として『日本「霊地・巡礼」総覧』を出して65本もの論考を掲載した。その他にも、動く人々のネットワークを巡礼とするもの[松岡 1991]、日本の民俗宗教の歴史に「神々の旅、修行の旅、参詣の旅、巡礼・遍路、文人墨客の旅」を認めるもの[宮家 1992]、巡礼を「うごくこと」に解消するもの[片倉 1995]、ディズニーランドの出来事に巡礼を見るもの[能登路 1996]⁽²⁴⁾、現代における「創られた巡礼」を扱うもの[中山 1997]、寺社の境内における巡拝を扱うもの[池田 1998]、観光と聖なる旅を関連づけるもの[橋本 1999]など、巡礼研究は多様な展開を見せている。

こうした研究の現場を見ると、概念に縛られて考察の対象を限定するよりは、むしろ具体的な事例を幅広く積み重ねることで、巡礼研究全体を活性化しようとの試みが伺える。しかし、その一方で巡礼研究の成果を体系的にまとめた、いわば巡礼研究の「全集」が刊行されることで[真野 1996 a・b・c]、研究対象である「巡礼」という概念に正統派が生じているようでもある。⁽²⁵⁾

ともかく再び「巡礼」の概念は混沌とした様相を呈してきている。

③……………巡礼の多様性、または巡礼をめぐる誤解

前章で見たように、日本におけるこれまでの巡礼研究の対象は、「四国」と「西国」を中心とした「聖数によって巡るべき聖地が定式化された巡礼コース」と、メッカやサンチャゴなどの「海外

における遠隔地への参詣コース」における巡礼にはほぼ限定されてきたことがわかる。研究内容も聖地と巡礼者の在り方の歴史的再構成を目指すものが中心で、意味付けも「非日常」⁽²⁶⁾、「擬死再生」⁽²⁶⁾、「異人」といった観念に比較的馴染みやすいものであった。

ところでこうした巡礼研究における巡礼の理解は、今後の研究展開を考えたときに妥当性を有するのだろうか。現代の巡礼に接していると、巡礼の担い手にとっては、聖地の属性はあまり関係なく、むしろ巡礼行為そのものを重視しているのではないかと思えるときが多々ある[中山1998]。すなわち、これまでの巡礼研究が巡礼として扱っていた枠組みが小さすぎるのではないか、あるいは、そもそも誤解を含んでいたのではないかという疑念が湧いて来るのである。

そこで、①研究対象としての巡礼の原点であったと思われるフォークターム（民俗語彙）としての「巡礼」と、②今後の研究課題を視野に入れた場合のテクニカルターム（分析概念）の範疇に収めうるであろう「巡礼的行為」、の二点に立ち返って考えることが必要となる。

「巡礼」という語の初出は天台僧・円仁の『入唐求法巡礼行記』であるという[星野1981]。これは円仁が唐に渡って天台ゆかり五台山などを巡った838～847年の求法旅行の日記である。また、平安中期に成立した『大日本国法華験記』には、コースも定めずに転々と各地を渡り歩く持経者の行為がしばしば「巡礼」と呼ばれているという[真野1980]。円仁の「行記」は「鎌倉時代までは仏徒の間でかなり広く知られ、あるいは読まれていたようである」[深谷1990]というから中世頃までは「巡礼」は平安的な意味合いを保持していたのだろう。

近世期には翻訳語としての「巡礼」が登場する。日本最古のヨーロッパ語と日本語の二言語辞書は慶長年間（1603-4頃）に作られた『日葡辞書』（亀井孝／解説1973 勉誠社）であるが、この中で日本語における「巡礼」(Iunrei)という言葉は、「Peregrino, ou romeiro」と訳されている。peregrinoは語源を遡れば英語のpilgrimageと同じである。ラテン語のperegrinusからperegreへ至り、「耕地の上で」という意味のagreの古い位格を含むことがわかり、「自分の耕地の上（生まれ故郷）から遠く離れていること」を意味することがわかる。端的に言えば「異郷への滞在」である。自分の土地を通過してゆく異邦人、放浪や旅行といった意味に近い。そこから宗教的な目的で遠隔の聖地（通常単数）へ旅することを表現することとなった。romeiroは「ローマに参る」ことが語源で、群衆、旅行団、祭典といったニュアンスを含んでいる。文久二年（1862）に作られた『英和対訳袖珍辞書』（杉本つとむ／編『江戸時代翻訳日本語辞典』1981 早稲田大学出版部）には「Pilgrimage, s. 巡礼」とある。こうした理解は現代においても辞書で継承され、海外における巡礼であるpilgrimageが「巡礼」と同一視されるようになった。

日本語の辞書はというと、『広辞苑』第三版⁽²⁹⁾（1983 岩波書店）では、「じゅんれい【巡礼・順礼】①信仰によって聖地・霊場を参拝してまわること。キリスト教徒のパレスチナ巡礼、イスラム教徒のメッカ巡礼、わが国では西国巡礼・四国巡礼・三塔巡礼・千箇寺参りの類。②諸所の霊場を巡拝する人。笈摺を背にし、菅笠を戴き、脚絆・甲掛をつけ草鞋をはき、詠歌を唱えて途中の門戸に銭を乞う。」とある。

イメージを形成するのが使用法であるとするれば、氾濫する雑誌などの書物やテレビ、ラジオといったマスメディア、均質性が求められる学校教育の影響は、辞書以上に大きいと考えられる。和辻哲郎のベストセラー『古寺巡礼』（1919 岩波書店）以降は、古い仏像や建物の鑑賞のために寺院を

訪れることも「巡礼」と称するようになる。この流れは概ね現在に至るまで主流をなしている。⁽³⁰⁾
土門拳の写真集『古寺巡礼』シリーズ（全5冊1963美術出版社，全66冊1976淡交社，など）は膨大な冊数を擁するし，NHK放送においても「古寺巡礼」という言葉が入った番組が山ほどある。学校教育の現場では「巡礼」は主に社会科の教科書で登場する。「巡礼」の内容として挙げられている対象は，日本においては「四国」と「西国」，海外においてはイスラム教におけるメッカ巡礼に概ね限られている。⁽³¹⁾

しかし，1990年代に入ると，これらとは別のニュアンスを含んだ，従来想定された聖地である寺社や霊域を訪れない「巡礼」の用法が大量に出てくる。書物で例を挙げるならば，植野稔『溪流巡礼三三ヶ所』（1991山と溪谷社），船村徹『演歌巡礼』（1992博美館出版），蓮実重彦『映画巡礼』（1993マガジンハウス），村上満『地球ビール紀行 世界飲み尽しビール巡礼』（1994東洋経済新報社），芦原すなお『芦原すなおのビートルズ巡礼』（1995文芸春秋），「古寺ならぬライカ巡礼 赤瀬川原平企画展「ライカ八十八ヶ所巡り」」『日本カメラ2月号』（1997）（図1）などがある。これらに共通するのは「巡礼」の対象がカルト的な聖性の付与されたものとなる傾向である。自分だけにとっての聖なる場所を2ヶタ程度の複数ヶ所だけ連続的に廻ることが「巡礼」の主たる内容となっているのである。



図1 「ライカ巡礼」を紹介する記事（『アサヒカメラ』1997年1月号 p. 132）

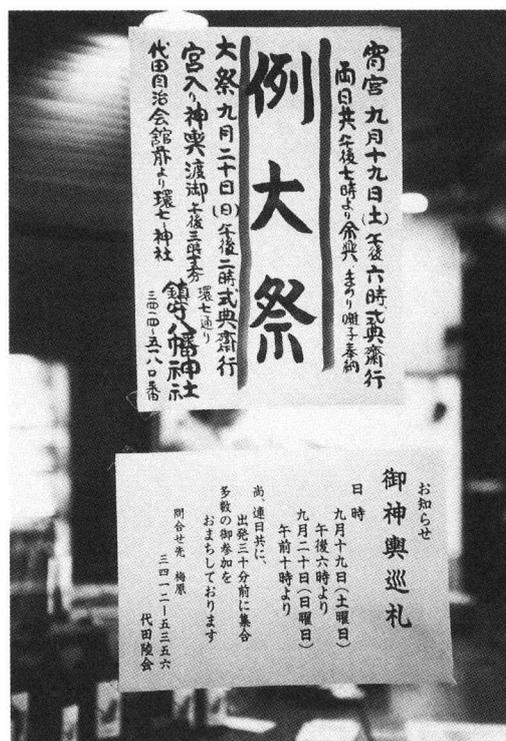


図2 御神輿も「巡礼」する時代になった(1998年9月, 東京都世田谷区代田にて採取)

ところで、ここまでの「〇〇巡礼」という表現の意味内容は、聖地の様相はともかく、聖なる場所を訪ね歩く旅という程度の意味であった。しかし、それとは逆に、聖なる対象が空間を移動することにも「巡礼」という表現が用いられる事例がある。「御神輿巡礼」(図2)は「カミの巡行」のことであろうし、丸木俊が描いた原爆の図が「世界巡礼」をし、第5福竜丸のエンジンが「反核巡礼の旅」に出るといえるのは、もはや一般的な表現であろう。

実際、被爆という事象に関わる行為には「巡礼」という表現が多用されている。『ヒロシマ巡礼』(小谷瑞穂子 1995 筑摩書房)、『日本一周平和巡礼旅日記』(尾形隆憲 1996 近代文芸社)、「核廃絶の巡礼」(「窓」『朝日新聞』1998.11.16 朝刊)といった表現は数多い。加えて、表現だけでなく、原爆が投下された日には慰霊の黙祷・献灯やダイ・インなどの儀礼、市内の各所に建てられた原爆慰霊碑の巡拝が行なわれるなど、巡礼的な儀礼行為も付随している。

逆に、一口に「巡礼」といっても巡礼での出来事が大分違うという状況もある。個々の巡礼者の動機や目的、手段、日程、意味付け、得たものなどはもちろん、地域による作法のヴァリエーションなども実に様々である。同じ三十三所の巡礼でも、秋田市内の観音巡礼は正月一番にやる縁起行事であり、最上巡礼は人が死者の供養として行なわれる死者儀礼、会津巡礼は女性しかやらず、嫁と姑の絆を深めるためのものであるという。多くの人が札所の何ヶ所かしか巡らない篠栗新四国霊場では朱印が軽視されており集印する人も殆どいない[中山 2000]。

ただ、調査をしていると「ジュンレイ」というものの言いは「四国」や「西国」を巡っている人々の口からはあまり発せられないことに気付くし、実際に口にしても漢語調で堅い表現なため、書き言葉であるとの印象を受ける。一般には「おまいり」や「～めぐり」、「おへんろ」、「お札まいり」



図3 巡礼ツアーは「観光旅行」か？（1998年10月撮影）

といった表現が用いられているが、その使用状況は個人によってかなりの偏差があるため、資料収集と分析は他日を期したい。以下では外形から心意に迫る場合に問題となる、巡礼的行為について見て行くことにする。すなわち、行為や形式などの外形が類似するものを取り上げる。

現代においては、旅行会社などが広告によって広く一般の人々を募集し、団体バスで「四国」や「西国」を巡るといったことは頻繁に行なわれているが、宗教者や研究者の中にはこれを「観光」だと断じ、「巡礼」では無いと批判する者もいる。外形は類似していても中味が異なるということなのだろうか（図3）。ミニ四国や七福神、お砂踏みには「巡拝」という語が使われることが多い。

複数の訪れる場所という点では、京都・奈良の古寺名刹や風光明媚な場所を巡る「観光」の「旅行」がすぐに思い浮かぶが、昭和初期には天皇の陵墓123ヶ所を巡る「皇陵巡拝」（図4）というものが流行した。

修学旅行も伊勢・熱田の両神宮への参拝がメインだったという。現代では修学旅行のメインは中学・高校では広島か長崎にある原爆資料館や原爆慰霊塔、原爆ドームなどの「原爆聖地」巡りであるところが多い。大学なら卒業旅行は海外旅行か放浪旅が主流であろうか。こちらは「長旅」であるという点で pilgrimage と類似している。近代以前の参詣も長旅であったが、加えて、実際のコースには多くの寺社が含まれていたという。比叡山千日回峰行も一般には巡礼と言わないが無数の拝所や苦行性など、内容に類似する部分は大きい。

朱印集めも「巡礼」に付随する特徴的な行為として考えられることがあるが、鉄道会社や観光協会が主催するスタンプラリーも同様の行為であろう。JR東日本が1997年から開催しているポケットモンスター・スタンプラリーでは、人気キャラクター「15種類のスタンプをゲットする」のが主題である。1996年に東京都の西武新宿駅構内でスタンプラリーの動機を聞き取りしたことがあ

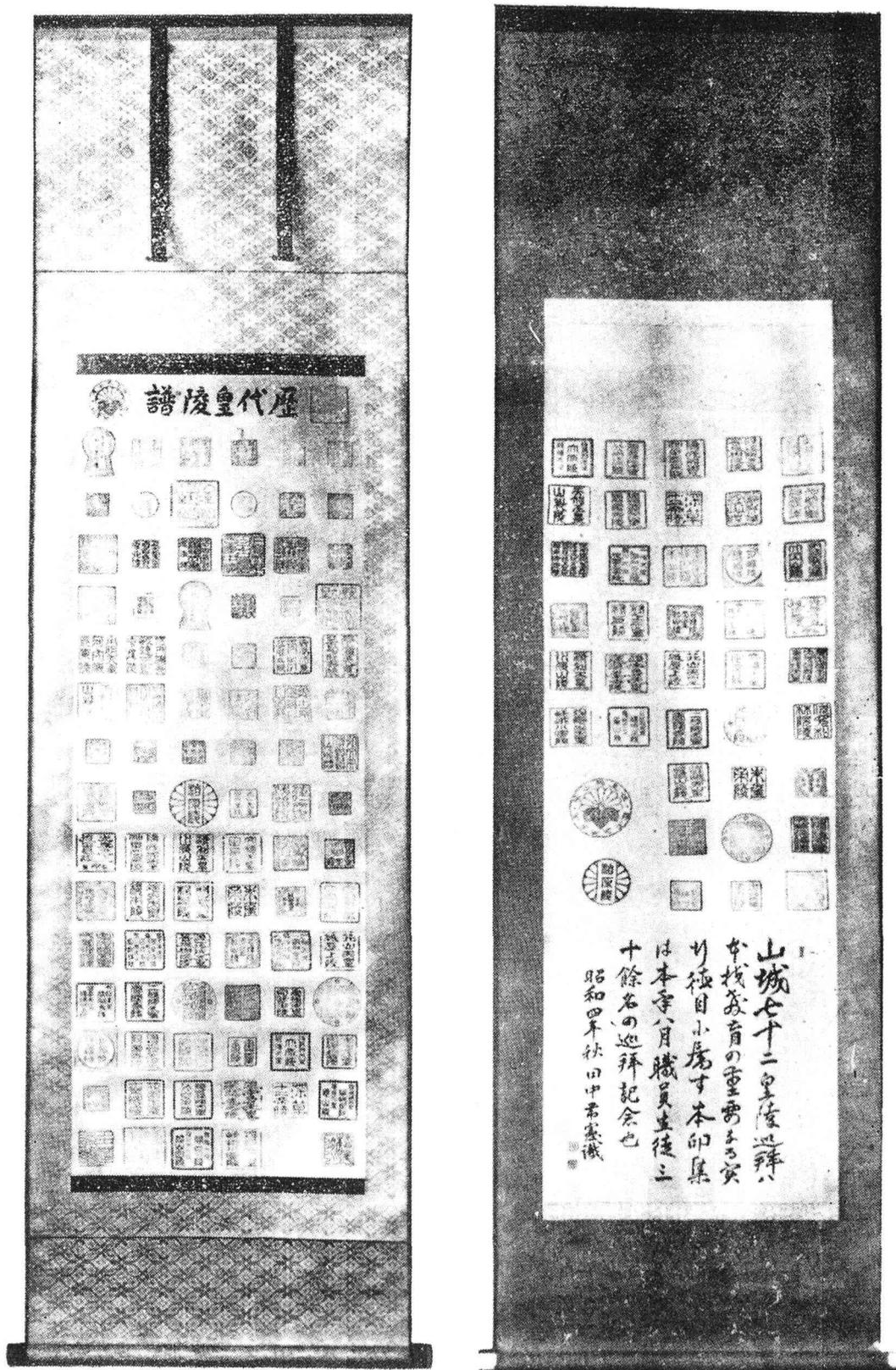


図4 皇陵巡拝を達成した掛け軸 (出典：京都府立桃山中学校『山城皇陵巡拝枝折』1936年刊)

るが、親子の絆や友情を深める目的を示す回答がほとんどであるのに驚いた経験がある。また、1996年にオープンした東京都池袋の「ナムコ・ナンジャタウン」という遊園地では、ナンジャビザで園内88ヶ所に隠されたビザスタンプを集めて遊んだり、「開運福猫神めぐり」と称して7匹の福猫神を訪ね歩き運勢を占うアトラクションがもうけられていた。

以上に掲げたものは、「巡礼」と表現されるものや、その周辺で行なわれていることのほんの一部であるが、その拡がりを想像するには十分な材料であろう。

④……………「巡礼」研究の課題

このように巡礼をフィールドから照射してみると、巡礼の多様な在り方の可能性が見えてくる。

巡礼も文化現象である以上、それを担う人々の知識の様式・体系として、時代背景や社会状況、政治情勢の影響を受けつつ、絶えず構成され創造され続けて来たものであると考えられる⁽³²⁾。

しかし従来の研究では、人々が「巡礼」と呼んでいる民俗語彙における巡礼や、広く巡礼の行為と位置付けられるもののほんの一部を扱っているにすぎないことがわかった。これは巡礼研究がまだ始まったばかりであるということの他にも、「巡礼は信仰心の発露たる宗教行為であり、非日常的でなくてはならない」、「現代の巡礼は産業社会民の観光であり稲作定住民の生活と異なるから考察に値しない」などの暗黙の了解があったのかもしれない。あるいは研究活動も政治状況と無関係でないため、皇陵巡拝やヒロシマ巡礼など取り上げるのに躊躇した事情もあるだろう⁽³³⁾。

しかし、2章で見てきた状況には民俗学や人類学、宗教学といった分析視角・方法論が相互に共通理解を得て研究を進展させようとする方向の可能性が見え、3章の状況は一層の多面的な巡礼研究⁽³⁵⁾を求められているように思われる。現在はそのためのテクニカルタームと概念の創出が求められているのではなからうか。従来の概念規定を導いた問題関心は、日本における巡礼コースの歴史を再構成し海外との比較も行なわれるなど一定の成果を収めたし、今後もその路線を踏襲して、巡礼の歴史的再構成を進めるとともに、巡礼の担い手に焦点を合わせることから生まれた「比較基準」をより妥当性の高いものにしてゆくことは求められるだろう⁽³⁶⁾。

では何を「巡礼」として分析すべきなのか。数々の「巡礼」は、儀礼としての同一性を探る方向で単なる聖地の往還と解釈してしまうにはあまりに濃密な時間が過ごされているし、何より多様な様相を呈している。それらの比較対照を可能にする基準としての巡礼概念が必要であろう。また、民俗学は常に現場から発想や論理を立ち上げ、そこから新しいものを見てきた。聞き取り調査や参与観察を地道に詳細に行なうことで当事者にとっての重要なことを考えてきたのである。巡礼を担う人々にとっての巡礼という視点が、巡礼研究にも求められていよう。

本稿は概念の創出を主眼とするものではないが、出来るなら民俗語彙に基づいて翻訳語の巡礼を含めると同時に日本語の参詣も含め、さらに行為などの外形に基づく概念を採用したいと考えている。この概念によって3章に挙げた様々な巡礼も分析の範疇に入ってくるであろう。即ち、「予め意味付けられ想定された、移動主体にとっての特別な場所や対象を、何ヶ所も連続的に、或いは長い道のりや時間をかけて訪れ、各地で特有の行為が行なわれるような主観的移動⁽³⁷⁾」である。ただしこの概念はこれまで述べてきたような問題意識に基づくものであるとはいえ、どのような研究上

の成果をもたらすのかは見当もつかない。

しかし、多様な巡礼の在り方が示しているのは、担い手の外形上の表出と内面との関係にこそ重要な問題が潜んでいるということである。それは人々の心に映ずる「歴誌」の問題であり、巡礼の意味の問題である。こうした「歴誌」生成過程の中にこそ、現代科学では超えられない癒しや救い、生きがい、心の処し方といったものを実現する豊かな民衆の知恵が秘められているのではなからうか。そしてこの「歴誌」の形成こそが担い手にとっての巡礼という文化の根幹にあると思われるのである。

註

(1)——器を変えずに中身（語の示す意味内容）を変える、逆に中身は同じだが器（意味内容を表現する用語）を変える、ということが常に行なわれてきたということ。これは「具体的に何が〇〇なのか」という事象の問いと、「〇〇とは抽象的には何なのか」という特徴の問いとの複合が基本にある。

(2)——アリエスの『〈子供〉の誕生』（1980みすず書房）や近代の国民国家が成立して初めて意識化された国民文化としての「日本人」など。近年の例では「ディアスポラ」が著名。

(3)——次章で見るが、この状況はターナーの理論があまりに魅力的であったが故に生じている面が強い。先人の魅力的な理論を自分の興味のある事象に適用するというただその目的のためだけに、当該事象を「巡礼」と定義付けることもある。あるいは日本においては「巡礼」と「宗教」という語が密接な関係にあるが故に、中身は「巡礼」そのものだが、「宗教」臭さを払拭するために異なる語彙を用意する、逆に世俗極まり無い事象を「巡礼」と表現して聖化する、といった問題もある。

(4)——『歴史地理』10・1・2（日本歴史地理学会）。明治期における巡礼研究には他に、原秀四郎「八十八ヶ所の研究について」『有声』32（1909）などがある。

(5)——喜田貞吉「西国といふ賤民」『民族と歴史』2-1（1915）や、逸木清流「三十三度の話」『郷土研究』3-8（1915）など。「四国遍路」『歴史地理』24-1（1914）、「円明寺と四国遍路」『伊予史談』3-2（1915）、「四国遍路考」『伊予史精義』（1924）といった景浦直孝による四国遍路に関する一連の研究も巡礼研究に含めることができよう。

(6)——高野山宝光院の雲石堂寂行による「四国遍路霊場記」（1688）や亮盛の「坂東観音霊場記」（1771）、四国巡拝者歓迎団が発行した三好広太の「四国霊場案内記」（1911）など。

(7)——高群逸枝の『娘巡礼記』（1912）や、徳富蘆花

の『順礼紀行』（1915）。

(8)——久羅木儀一郎「大分縣下に於ける郷土西國」大分県史蹟名勝天然記念物調査会／編『史蹟名勝天然記念物調査報告書』第十一輯（1932）（田中智彦先生の御教示による）や、雑誌『観音』誌上で1935年から1938年にかけて掲載された、松川弘太「三十三所観音全国札所集覧」（5-3~6, 6-1・2・5, 7-2・3・5, 9-3~5）、桂又三郎「備中三十三ヶ所」（8-5）、津田応助「昔の尾張三十三観音順拝と路次」『観音』（8-5）、などの一連の調査研究がある。こうした類似する巡礼は「うつし（写し・移し・遷し）巡礼（霊場）」と呼ばれ、著名なものとしては「西国」をうつしたという坂東三十三観音霊場や秩父三十四観音霊場がある。「西国」、「坂東」、「秩父」は合わせて「百観音」とも称され、「四国」と合わせて「四大霊場」として多くの巡拝者を集めている。本来うつしである「秩父」や「坂東」をさらにうつした巡礼コースもある。

(9)——真鍋広済「六地藏と六地藏巡り」『地藏尊の研究』（1941 富山房）や、竹内利美「廻国巡礼と納経供養」『農村信仰誌—庚申念仏篇—』（1943 六人社）（いずれも真野／編『講座日本の巡礼』全3巻1996に収められている）などがある。

(10)——近藤喜博／編『四国霊場記集』（1973 勉誠社）、同『四国霊場記集別冊』（1974 勉誠社）、金指正三校註『西国坂東観音霊場記』（1973 青蛙房）、中尾堯／編『古寺巡礼辞典』（1973 東京堂）、広江清／編『近世土佐遍路資料』（1966 土佐民俗学会）、斎藤昭俊／編『仏教巡礼集』（1975 仏教民俗学会）など。

(11)——新城常三『社寺参詣の社会経済史的研究』（1964 塙書房）、速水侑『観音信仰』（1970 塙書房）、近藤喜博『四国遍路』（1971 桜楓社）、同『四国霊場記』（1973 勉誠社）、清水谷孝尚『観音巡礼—坂東札所めぐり—』（1971 文一出版）。

(12)——平幡は一般の巡礼者向けのガイドブックとして

『西国観音巡礼』(1965)や『四国八十八ヶ所』(1967)を礼所研究会から出版したが、内容的には歴史的展開や民俗にかなり詳細な記述が認められ、研究者の業績と非研究者の知識を広く媒介したと評価できる。

(13)——武田明の視点は『巡礼の民俗』(1969 岩崎美術社)にまとめられている。前田卓は納札の調査から、『密教文化』に「四国遍路の社会学的研究」を数回にわたって掲載、1971年には『巡礼の社会学—西国巡礼・四国遍路—』(ミネルヴァ書房)としてまとめ、巡礼を社会現象として分析した。五来重は1969年発表の「信仰—遍路・巡礼・遊行聖」(『伝統と現代』2-3 学燈社)で「遍路・巡礼」を「遊行」と結び付け、この着想をもとに『遊行と巡礼』(1989 角川書店)をまとめた。ここで五来は、巡礼は本来的には庶民の旅とは異なるプロの苦行の一形態で、遊行の順路が決まるようになったものが巡礼であるとし、巡礼を「巡り歩く宗教的修行」と意味付けている。田中博は1973年に「文化現象としての四国巡礼」(『地理』18-4・5)を著している。

(14)——真野はこの論考で「巡礼」という語を使用していないが、のちに自身で巡礼研究の一つと位置付けている[真野 1978]。

(15)——巡礼を「中心に向かう型」と「周辺に向かう型」に分類したもの。青木の論はターナーの論を手がかりとしているが、アメリカ人類学で流行した「文化とパーソナリティ」研究の延長線上にもあると思われる。

(16)——イスラム教におけるメッカへの巡礼は、聖典に明示された五行の一つとしてのハッジのこと。もっとも、細かく言えばハッジはメッカの北東にあるアラファートの丘へ行くこと(大巡礼)であり、対してカアバ神殿を中心に巡るのをウムラ(小巡礼)とする場合もあるという。

(17)——NHK ブックスの『旅のなかの宗教』(1980 日本放送出版協会)。この中で真野は、先述の「社寺参詣」概念規定を「巡礼(参詣)」に置き換え、①について「旅の途中でついでに脇道にそれる副次的な参詣があったとしても大きくは究極の目的地に達することによってのみ、その参詣行為が完結するという構造をもっている」との説明を加える一方、「個々の寺々に参拝することと、霊物を巡拝することは次元の異なった宗教行為」ともしており、なぜ参詣の下位範疇として巡礼を考えるのではなく、逆に巡礼の中に参詣を含めたのが捉えにくくなっている。これは、おそらく真野が、一切の霊しき所を転々と巡る旅こそ根本形態であり、参詣はそれが発展して一ヶ所に収斂していったものと考えているため

と思われる。また、真野はこれ以降、②の「各地をめぐる歩き」という視点から研究を進め、その成果は1991年に『日本遊行宗教論』(吉川弘文館)としてまとめられた。

(18)——単純に、pilgrimageの訳語としての「巡礼」を分析概念として採用した、とは考えにくい。星野が「遠隔参詣の類型的な研究序説」で述べているように、やはり方向性は「比較のパースペクティブに立ち類型化への可能性を探求しようとする立場を基本的な出発点とする」のであり、「個性的なゆえに多様な現象を整理するための枠組の抽出への試み」が研究の根底にある。

(19)——渡辺昌美『巡礼の道』(1980 中公新書)、「聖地と巡礼—聖なる空間への往還」『週刊朝日百科 世界の地理』100 (1985)、ピエール・パレ、ジャン・ノエル・ギュルガン『巡礼の道 星の道 コンポステラへ旅する人びと』(五十嵐ミドリ/訳 1986 平凡社)。

(20)——松崎憲三「地藏尊の遊行習俗について」『まつり』36 (1980)など。松崎は一連の論考を1985年に『巡りのフォークロア—遊行仏の研究—』(名著出版)としてまとめた。

(21)——豊島修「西国巡礼聖の一資料—熊野那智山の三十三所巡礼行者を中心に—」大谷大学国史学会編『論集・日本人の生活と信仰』(1979 同朋舎)や小嶋博巳「西国巡礼行者の存在について」『常民文化』7 (1984)などの一連の巡礼行者研究は、複数の研究者の手によって1980年代に深められ、その成果が小嶋博巳/編『西国巡礼三十三度行者の研究』(1993 岩田書院)としてまとめられた。

(22)——田中博「巡礼と近代化」『地理』25-3 (1980)、同『巡礼地の世界』(1983 古今書院)、小田匡保「小豆島における写し霊場の成立」『人文地理』36-4 (1984)、岩鼻通明「西国霊場の参詣曼荼羅にみる空間表現」水津一郎先生退官記念事業会編『人文地理学の視園』(1986 大明堂)、田中智彦「愛宕越えと東国の巡礼者・西国巡礼路の復元」『人文地理』39-6 (1987)などがある。特に田中智彦が展開した、巡礼記や石造遺物の丹念な調査から巡礼者の行動や巡礼路の復元を試みる一連の作業は、最も精緻な分析の一つとして挙げられる。

(23)——後藤洋文「関東地方の新四国霊場」『仏教と民俗』16 (1980)、『まつり』36における特集(1980)、星野英紀「篠栗新四国霊場のあゆみ」『宗教と現代』10・11月号合併号(1984)

(24)——着想と分析は、Alexander Moore, Walt Disney World: Bounded Ritual Space and the Playful Pilgrim-

age Center. in: Anthropological Quarterly 53 (1980) に拠っている。

(25)——「日本における巡礼」の概念が混沌とするなか、日本の研究者における「海外における巡礼」の概念も問題にされている(河野真1993「西ヨーロッパの巡礼慣習にたいする基本的視点について—特に日本でおこなわれている通念の修正のために—」『愛知大学文学論叢』102・104など)。

(26)——ここから逆に研究対象を、徒歩による巡礼や、稲作定住民のハレなる慰安としての、又は病や罪、貧などによる定住生活からの脱落者が行なうものとしての巡礼、寺院巡りに矮小化する傾向も生ずる。

(27)——何を祀るか、拝所が何ヶ所あるか、どんな歴史があるか、どんな意味が喧伝されるかなど。

(28)——ドイツ語の事情は異なるという。詳しくはウド・トゥウォルシュカ『遍歴』(種村季弘/訳1996青土社) pp. 114-121を参照。

(29)——『広辞苑』の「じゅんれい」項は内容が第四版では幾分削減されたため第三版を紹介した。

(30)——「山水巡礼」(1920玄文社)や増田広州『句碑巡礼』(1959原晴堂)、北条秀司『奇祭巡礼』(1969淡交社)など寺社以外への「巡礼」を表現したものもあるが、数は少ない。

(31)——東京書籍の『日本史B』1998には「西国三十三か所などの札所巡礼」(p. 119)、「寺社の参詣や巡礼」(p. 173)、「四国や西国巡りの巡礼」(p. 202)といった表現があり、山川出版社の『新世界史』1998には「聖石を祭るカーバ神殿をもつメッカの町は…多くの巡礼を集めて栄えていた」(p. 117)、「メッカへの巡礼」(p. 119)

といった表現がある。

(32)——ここには、いわゆる人間の想像力と創造力、民俗の多様性と可変性、民俗宗教の受容と定着の問題がある。

(33)——もっとも、だからといって四国遍路などの研究がどのようなイデオロギーに基づいているのかは検討されず、歴史的事実であるということを自明なものとしている。

(34)——巡礼は地域で伝承される色彩が薄く、仏教の影響が強く、時代背景や社会情勢に流されやすく古いものを伝えにくいいため、日本民族の不変の本質が備わっておらず、したがって民俗ではないという意見もあるかもしれない。しかし筆者は巡礼も人々の歴史的な文化的行為である以上、民俗学の対象たるべきだと考える。

(35)——巡礼研究などというテーマ研究の手法がそもそも成り立つのかあやしいが、近年は巡礼研究会の活動などを見てもそれに向かう流れが強い。

(36)——文化や心意の連続性・不連続性を探るための土台。世界の「巡礼」との比較のため。

(37)——移動は自力でなくとも構わないし、運心回峰のように現実に空間を移動しなくても構わない。

(38)——「歴誌」は筆者の造語。意図するところは、人々の実態的な歴史的事実ではなく、個人の世界観に基づいて当人の内面で紡ぎ出された個人的な歴史的物語。文化的英雄やアイドル、隣人の人生や体験を想像し、そのことによって呼び起こされた自分の記憶や歴史と重ね合わせることで、再構成され創造される個人誌。伝承されてきた人々の心の歴史や心意伝承。

参考文献 (以下に掲げていない文献に関しては本文・註に明記した)

- 池田暁子 1998 「聖地内巡礼」『宗教民俗研究』8 日本宗教民俗研究会
片倉もとこ 1995 『「移動文化」考』日本経済新聞社
真野俊和 1976 「巡礼」 桜井徳太郎/編『日本民俗学講座三・信仰伝承』朝倉書店
1978 「巡礼研究の現況」『日本宗教史年報』1 佼成出版
1980 『旅のなかの宗教 巡礼の民俗誌』日本放送出版協会
真野俊和・編 1996 a 『講座 日本の巡礼 第1巻 本尊巡礼』雄山閣
1996 b 『講座 日本の巡礼 第2巻 聖蹟巡礼』雄山閣
1996 c 『講座 日本の巡礼 第3巻 巡礼の構造と地方巡礼』雄山閣
田中智彦 1997 「巡礼と社寺参詣」『講座日本の民俗学7 神と靈魂の民俗』雄山閣
中山和久 1997 「巡礼と現代」『日本民俗学』211 日本民俗学会
1998 「生活の中の巡礼」『生活学論叢』3 日本生活学会
2000 「巡礼と行場の関係—篠栗新四国霊場を中心として—」『山岳修験』25 日本山岳修験学会
能登路雅子 1996 「デイズニーランドの巡礼観光」山下晋司/編『観光人類学』新曜社
橋本和也 1999 「「聖なる旅」と観光」『観光人類学の戦略—文化の売り方・売られ方—』世界思想社

-
- 深谷憲一 1990 「解題」『入唐求法巡礼行記』中央公論社
星野英紀 1981 『巡礼一聖と俗の現象学』講談社
松岡正剛・監修 1991 『巡礼の構図』NTT出版
官家準 1992 「日本人の旅」『宗教民俗学への招待』丸善
官家準・他 1996 『日本「霊地・巡礼」総覧』新人物往来社

(国際日本文化研究センター)
(2001年2月28日 審査終了受理)

Understanding and Misunderstanding on the Term of “*Junrei* (Pilgrimage)”

NAKAYAMA Kazuhisa

The matter of concept always weighs on our mind. We are not fainthearted enough to easily resist the magic of the words, establishing the “definition”, and we are not strong minded enough to go a step farther ignoring them either.

This paper deals with the matter of concept which is often a complicated problem, as a case study on the term of “*Junrei*”. The subject of consideration includes not only the folkloristic ones but also the actions in general term of “*Junrei*”. First, the trend of this study is chronologically grasped and the technical term of “*Junrei*” as an analytical concept is considered. Then, putting terminology and actions of “*Junrei*” in perspective, “*Junrei*” as a folk-term is studied. Especially in the latter, the diversity of “*Junrei*” which is rising from its circumference is presented with several figures, entrusting the potential power of the folkloric facts, which is beyond the speculation of folklorists.

The translation of “*Junrei*” tends to make difficulties, and the author of this paper tries to reorganize this matter in order to make comparative studies with pilgrimage abroad.

At final stage, the effective definition of “*Junrei*” concept to satisfy this critical mind should be established; an attempt is presented in this paper. However, the diversity of *junrei* suggests that an important issue is hidden in the relation of externals and internals of actual pilgrims. This is the matter of “*Rekishī* (their own historical story)” which is reflected in people’s mind, and the matter of the meaning of “*Junrei*”. It seems to be in the process of forming the “*Rekishī*” where exists the vast folk wisdom which realizes healing, relief, purpose of life or management of mental life.

key words: concept, term, translation, pilgrimage, diversity
